

然しかるに貴辺きへんは故次郎入道殿おんの御子ごにてをはするなり。御前ごぜんは又よめ(嫁)なり。いみじく心かしこかりし人の子とよめ  
とにをはすればや、故入道殿このあとをつぎ、国主も御用ごなき法華経を御用ごあるのみならず、法華経の行者をやしな(養)  
はせ給こて、としどし(年々)に千里の道ををくりむか(迎)へ、去みまかりぬる幼子おきなごのむすめ御前ごぜんの十三年に、丈六のそとば  
(卒塔婆)をたてて、其面そのおもてに南無妙法蓮華経の七字をあらハ躑してをはしませば、北風吹ほくふうふケば南海のいろくづ(魚族)、其風そのかせに  
あたりて大海たいかいの苦くるしみをはなれ、東風とうふうきたれば西山せいざんの鳥鹿ちようろく、其風そのかせを身みにふれて畜生道をまぬかれて都卒とそつの内院ないいんに生れん。  
況いわんやかのそとばに随喜をなし、手てをふれ眼まなこに見みまいらせ候人にんるい類をや。過去の父母も彼かのそとばの功德によりて、天の日  
月の如く浄土をてらし、孝養の人ならび竝ならびに妻子は現世いのちには寿を百二十年持たもちて、後生ごしようには父母とともに靈山浄土にまいり  
給たまはん事。水すめば月うつり、つづみ(鼓)をうてばひびきのあることしとをぼしめし候へ等云々。此これより後々のちのちの御そ  
とばにも法華経の題目をあらハ躑し給へ。